第17号
平成17年10月

生涯学習の窓

富山大学生涯学習教育研究センターニュース

「生涯学習教育研究センター」の発足と今日的意義

富山大学長　西頭　徳三



平成17年10月１日、新・富山大学は、人文学部、人間発達科学部、経済学部、理学部、工学部、医学部、薬学部、そして芸術文化学部の８学部を有する、総合大学として出発した。特に、本学は、富山県内の基幹的な高等教育機関として、地域社会に対して従前以上の責務を果たさなければならない。特に、近年の少子高齢化、世代間の断絶、若者の凶悪犯罪の多発など社会的リスクが高まり、地域社会の教育力が低下する中で、本学の「地域連携推進機構」に新たに発足した「生涯学習教育研究センター」は、重責を担っている。

「生涯学習」とは、いつでも，どこでも，だれでも学習できる機会をつくること，と云われるが、大学など高等教育機関が社会人を対象にする場合には，リフレッシュ教育とも呼ばれる。そこで、私は、社会人の立場ではなく、大学の教育現場から、「生涯学習教育研究センター」の今日的意義について考えてみたい。

本稿の狙いを述べるには、まず私の体験の一端を紹介するのが最も手っ取り早い。平成10年頃、私は当時勤務していた国立大学大学院の修士課程に、「社会人リフレッシュコース」を創設しようと関係機関に働きかけていた。ある年齢層の若者からなるミニ・コミュニティに言いようのない閉塞感が漂っていたからだ。言い換えると、学生たちは現実社会からかけ離れた

世界に閉じこもっているように思われた。その折衝過程では、「果たして入学者を確保できるか」という質問を何度も浴びせられた。この当時、どこの国立大学大学院にも社会人を対象としたコースが設けられていなかったからだ。

ところが、関係者の予想に反して、社会人第一回生には異色の顔ぶれが揃った。そのひとりKさんは、旧制O大学工学部を卒業し敗戦直後からずうっとO市で会社を経営していたが、社長辞任を機に妻の故郷E県に帰った。そして，新設されたばかりのこのリフレッシュコースの実験系研究室に入学した。すでに70歳を越えていた。

Kさんは朝一番に研究室に入る。掃除を済ませ新調の白衣を纏い電子顕微鏡を覗く。夕方になると実験台をきちっと整理して家に戻る。解らないことがあると、50歳も年下の学生たちに気軽に尋ねる。解答が得られると、「ありがとう」とにっこり笑って礼を言う。その上、Kさんは研究室の出来事を社会と結びつけて解りやすく解説した。決して押し付けがましくない。一ヶ月もしないうちにその研究室ばかりか、複数の社会人学生の行動により学部内の雰囲気ががらりと変わった。

その頃の私は、講義に出ると学生たちが学ぶことを忘れたように見え、ハッとしたことが度々あった。彼らは大学の知識偏重の講義に興味を示していないように感じられた。科学技術の成果は学生たちの現実の生活に結びついた時、はじめて生きた知識になる。生きた知識が学生たちの日常生活の中に深く根を下ろすようになった時、その後の生き抜く力・知恵となる。ちなみに、昭和30年代頃までは、子供たちの学校への行きかえりの道に交番や郵便局があり、豆腐屋、靴屋、鍛冶屋そして印刷工場があった。そこには額に汗して懸命に働く姿があり、貧しいが多様な現実生活があった。つまり、子供たちが学校で学んだ知識は、日常生活と密接に結びつきながら皮膚から吸収され、生きる力として蓄えられていった。

私は大学の教育現場が地域社会と結びつくことを「キャンパスの社会化」と呼ぶようにしている。もちろん、これは大学の狭隘なキャンパスを市内や地域社会にまで拡大するという物理的な側面を含めて、講義・教育内容の質的社会化を意図した言葉である。学生たちはキャンパス内の同じ研究室で社会人学生と語り合うことで、講義や実験内容の社会的な位置づけを明確にでき、学んだことを社会に出てからの生きる力・知恵に転化できる。つまり、このことは社会人と学生が同じ立場で、同じ目線で語り合える点に大きな意義がある。「生涯教育」は大学の教育現場に対して大きな教育効果をもたらす。

新・富山大学の発足に当たり、私は、「融和」と「改革」という二つの基本方針を提示した。その理由は「融和」と「改革」が新・富山大学発展の原動力であると確信するからだ。もちろん、ここでいう融和とは、再編・統合以前の三つの大学が打ち解け仲良くすることのみを意味はせず、地域社会との融和、個々の市民との融和などの広い意味を含んでいる。その意味でも、今後、「生涯学習教育研究センター」が果たす役割に期待している。私は、新大学における「生涯学習」は社会人のためだけではなく、多くの一般学生や教職員にとって不可欠な要素と考えている。

富山大学の大学開放事業

生涯学習教育研究センター

2005年10月、富山県内の３国立大学が統合し、新しい富山大学が開学しました。新大学においても、優れた教育・研究活動を展開するとともに、それを地域に還元し、交流する大学として発展していくことが求められています。

ここでは、生涯学習教育研究センターの担当する富山大学の大学開放事業をいくつか紹介いたします。教職員の皆様におかれましては、ご理解とご協力をお願いいたします。

公開講座

富山大学では、一般市民の教養形成、健康増進などのニーズにこたえるために、特別な教育サービスとして公開講座を実施しています。ジャンルとしては、教養講座、ＩＴ講座、外国言語・文化講座、健康・スポーツ講座などが開講されています。

諸先生方の専門分野の基礎的な知識、あるいは最新の研究成果などを、わかりやすく解説していただいています。必要に応じて、学外のスタッフを招聘することも可能です。

公開講座は、各部局から選出された公開講座専門委員会を通じて企画・実施することになっています。地域貢献として重要な意義をもつ事業ですので、積極的にご協力いただくことを願っております。



▲ＩＴ講座の風景

オープン・クラス（公開授業）

近年、一般市民の高学歴化・高学力化の進展は著しいものがあります。「専門知識」を求める声も高くなっています。富山大学では、「オープン・クラス」と称してこれまで毎年約1000科目の正規学生向けの授業を市民に公開してきました。「公開」とはいえ、一般市民向けに特別な変更の必要はなく、普段通りの授業内容を実施していただくだけです。アンケート調査の結果によれば、一般市民向けに配慮せず、正規学生と同じように扱われ、本格的な知識・技術にふれることに喜びを感じる方が多いようです。また、社会人としての生活感覚・知識に基づいた発言や授業態度が学生に対してよい刺激になっている、との声も担当の先生方からお寄せいただくこともあります。ぜひとも、多くの授業を開放していただきたく存じます。

出張公開講座

県や市町村をはじめ、各種団体においては定期的に講演会や学習会を開催することが多くあり、富山大学にも多くの講師依頼がきます。そうした催しをサポートするため、当該分野の先生方に「出張公開講座」のお願いをすることがあります。地域に出向いての教育サービスということで、富山大学全体に対する信頼感のアップにもつながります。

なお、各種団体の講演会などの企画の際に役立てるため、本センターでは、過去の講演会テーマや講師名を記した一覧表を作成し、配布しています。また、ホームページ上でも「富山大学講演・講座データベース」を立ち上げています（http://www.life.toyama-u.ac.jp/cgi-bin/db/db.cgi）。データベースの内容は、先生方の所属、氏名、講演可能なテーマ、その簡単な概略です。いつでも追加登録可能ですので、サイトをご参照の上、多くの先生方のエントリーをお待ちしております（お返事はe-mail：lifelong@life.toyama-u.ac.jpまで）。



ものづくり講座の風景▶

発行：富山大学生涯学習教育研究センター／〒930-8555富山市五福3190／TEL076-445-6956／FAX076-445-6960